

心の世界

卒業を前に

一組



木下 米子

中学生生活も
終ろうとしている今
どんなことを考えて
いるのだろう
人は人
自分は自分
きつとちがった道を
進むだろう
二度とこないこの三年間
よい思い出となっているか
いや
なっていないかも……
うれしいような
さみしいような
この瞬間である



枯木

四組



加藤 治子

おれの役目終わってしまった
と静かにたたずんでいる枯木
世間のおいも知らず、ただぼつと
でもこの枯木にも
太陽エネルギーを
新鮮な雨水を
胸いつばいにすいこんで
希望にもえていたこともあっただろう
一つ一つの若き思いでを
年輪に深くきざごみこみ
いつまでも忘れずにと……
つめでおじせば、
ぼろぼろとくすれてくる枯木
力いつばい生きてきたこの枯木に
幸せだった？
と聞いてみたい！



登山者

一組



田中見太郎

僕は登山者になりたい
着実に一步一步進んで行く登山者だ
時には困難な岩山を登らねばならな
いだろう
なだれにもあうだろう
そうなんしそうにもなるかもしれない
でも、いつも冷静にのぼろう
猛吹雪でもおそれず
戦うべき時は戦う
そして、自分のことで手がいつばいで
ない時には、後からくる後輩をばげま
してやろう
心のやさしい登山者だ
後でふりかえってみて失敗だらけの
登山かもしれない
でも失敗あつての進歩だ
せいいつばい進もう





黒板の一言

一組



新宅美知子

おい その白いものなんだい
ははんそれが白墨というものだな
いつもいつも
ぼくの顔にいたずらをする
おいおい そっちの布がやぶれている
スポンジはなんだい
もしやそれはいたずらを
消すものじゃないか
それで いつもぼくの顔を
こそがすのだろう
ぼくはとつてもくすぐつたいよ
くすぐたなくてもいいから
きれいにしてくれ
ぼくも 皆の顔のように
きれいにしたいんだ
それなのに……
白墨の粉も取ってくれないで
皆は散って行く
おいおい 帰らないでくれよ
皆は冷たいなあ

空

二組



内藤 秀幸

どうどうとしている空
なきだしそうな空
ないている空
どんな空でも
ぼくはすきだ
かなしい時
うれしい時
つらい時
どんな時でも
空をみる
空は 大きく広く
ただ だまつている
でも ぼくが空をみると
空はいつも
がんばれよ
といつてくれるのだ
空を見るたびに
かなしいことも
つらいことも
みんなわかる



雲

三組



石森 広

地平線の向こうに
くろんぼのような雲が
もくもくと出始めた
左右にぐんぐん伸び
空高く群れをつくり
マラソン選手のように
走り始めた
キラキラ
輝き光つてゐる太陽も
雲にかくされ
だんだん だんだん
暗くなつていく
かくれた雲と雲の間から
わずかに ぼやっと光つてゐる
雲はだんだん厚くなり
太陽の光は まったく消えた
雲はまたいつしようにけんめい
山へ山へと向かつていく



道

三組



小石 正幸

彼の前の道は
いま二つの道にわかれる
彼はまずどちらにいくか
決めなければならぬ
そしてその道の前に壁がある
どちらをえらんでも壁はある
彼は決心した
彼は壁の向こうにある
「高校」に行くことを
そして彼は壁の前に立つた
飛びこすには少し高すぎる
でも幸いに一本のロープがあった
彼はそれにつかまって
登りはじめた
ほかの者も登りはじめた
そしてどんどん登っていく
そして彼をおいこした
彼は あせりはじめた
時にはこんなことはやめようか
と思った。
でも「こ」でやめたら
又はじめからやりなおしである
彼は頂上をゆめみて
いまも登り続けている



夢

四組



山口 幸子

目をあけたらみんな泣いていた
わたしが死んでいるらしい
今晚はそうしきだそうだ
だれのつて？ 私のだ
びつくりした 私は生きているのに
「私は生きてるんだー」
叫んだけれどみんなには聞こえない
ハンカチに目をあてて
おくやみを言っている
ああ 私からは何でも見えるのに
手を動かそうとしても
びくともしない
まばたきもできない
心ぞうも止まっているらしい
「わあっー 助けて 助けて」



思い出の三年間

五組



宮 要介

中庭の桜の花が
ほころんでいた日
猛暑の日の野球の応援
寒風の日のクラブ
定期試験の前夜
修学旅行
運動会
つらかった
楽しかった
うれしかった
思わず涙を流した時もあった
いろんな事のあった三年間
長いようで、短かった三年間
それももう 終わりか！





川

四組



下光

隆

川は流れる いつまでも流れる
 歴史の中に生きてきた川
 歴史の中に流れてきた川
 川はなんでも知っている
 いつも静かに流れてきた
 でも時には大あばれする
 生のたずながみだれたように
 くるいそしてさけぶ
 ゴツゴツと大きな音を
 たてながら
 鼓膜が破れそうだー
 どれくらい時間がすぎたろうか
 川は静かにながれていた
 人間のように意識してるかのように
 静かだ 川は偉大な力をもっている
 はげしい流れに人の命をさそいいれ
 なにもおそれるものがないように
 でも人は 川をうらまない
 川はいつまでも静かに流れる
 人の心を清めながら
 人に愛されながら
 歴史の中に生きている

川は静かに流れる
 人の心を清めながら
 いつまでも いつまでも
 歴史の中に生きていく



細い道

三組



奥村真理子

私たちは
 今、細い道を歩いている
 それは
 みんな通ることができない
 中には
 おし出されるものも
 あるかもしれない
 私たちは
 この細い道を
 無事 わたろうと
 ゆっくり 前進している
 “おしだされずに
 足を踏みはずさずに”
 と祈りながら

苦難を乗り越える意思 (四組)

五十川明吉

心から信頼できる友人を
 持ったときこそ最大の喜びだ

伊藤 充

いつも心にゆとりを持ち
 いつもほほえみをわすれずに

後 重晴

あらゆることをのりこえて

織田 春樹

「考える」そこに人間本来の価値が
 あるのだと思う。考えるという
 人間の特権を大切にしていこう



坂井 隆雄

この三年間の反省を

自分自身成長とする

下光 隆

空は青い、雲は白い 人間も空や雲の
ように純粋な美しい心にならなけれ
ばならない

海のように陸がある 海をわたらな
ければ陸へ行けないように ぼくたち
も通らなければならぬ道がある
海はあるときも おだやかなときも
ある

人間はあるときがあつてはならぬ

小路 徹雄

人は「うすもれた道」を「シヤベル」と
「ふるはし」で、掘り出さなければなら
ない。しかしその苦しみは道をまちが
えて滅びるよりましだろう

高木 和義

ファイトと努力でやりぬこう

館 秀男

私達は、勇気と希望をもつて、

未来に向かって前進しよう

東藤 幸雄

ファイト、これが若者の

シンボルである

戸田 隆

目的に向かって前進せよ

入場 昭雄

真剣にかつほがらかにファイトを出し
て自分の道を進んで行こう！

橋本 豊

広い心を持つて物事に当たり、妥協し
つつ我が道を進む

早瀬 克人

経験は人生の最大の勉強である

東 政義

自分自身勇気を持つてやること

宮下 仁利

正しい道を進み、人間的に

立派な人になることを誓おう

村本 邦夫

ただ一言！何事があつても

友人だけは大切に

山橋 二郎

おしせまつてきえるよ

ろくなことはない

本橋 英一

なにものも恐れず勇気をもつて

ぶつかっていく

山元 敏晴

人は、いそがしいほど

生活にはりがあり、生きがいを感ずる

吉岡 文雄

目的にむかつてまっしげう

伊藤 可祝

困難にまざる教育なし

今井 幾美

その日にしなければならぬことを
明日にのばすなそして毎日毎日を有
意義にすごそう

魚住美千代

自分で、「どうしよう」と決めたことは、
どんな難関があつても突き破つて進ん
で、それが、かなった時の喜びを味わ
うことのできる人間になりたい

片岡 光子

何事も人にたよらず、

自分で努力しよう

加藤 治子

進道に大きな壁があっても、回り道などしないで、その壁を完全にこわし、消化してから又、一歩進もう

北川 清美

何事にも、くじけず正しい道を歩もう

北出 直美

何事にも、うちかつ強い意志を持って、前進しよう

佐藤美枝子

人間は風船のような、はかないものである。新しい時は大きくふくらみ、年がいくとちぢんで使えなくなってしまう

谷口 博子

目的は出世することだ

道念婦美代

「勝ち」という信念でー

仲村 澄子

人にとって迷うことも大切である。
しかし最後の決断は自分で
できる人でありたい。

西田 治美

「失敗は成功のもと」のように何事にも努力すれば、きつと成功するだろう

松村 道子

手を取りあう力の偉大さ

密谷 春枝

自分が、まじめに歩めば

自ずから人は自分を尊敬してくれま
す

箕原真知子

「一に実行、二の実行」

世の中すべて実行あるのみ

向田 直子

噂をたてられ 憎む人より

それを耐え忍ぶ人に！

森山恵美子

過ぎ去る月日の早さ、

一日一日を有意義に

矢伝 啓子

励まし助け合ってこそ

本当の友情が生まれる

数田 数子

別れゆく友の笑顔いつまでも

山形加代子

良き友は生きるための

必要な道である

山口 幸子

どんな小さなことでも

自分の全力をあげて事にあたれ

山本るり子

何事も自分の力で人にたよらない

吉田 恵子

世間をまつすぐ前をむいて

歩ける人間になろう

吉村由美子

自分の信じた道を歩もう



人生を考える

パスカルは“人間は考える片である”と言ったそうだ。今まで世の中のことや人生の生き方など考えてみたこともなかったが、自分の頭でもういっぺん世の中を見廻すと、これまで正しいことだと思っていたことが案外そうでもなかったり、自分のあこがれていたことがどうもつまらないものになってきた。

「ある人間」



一組



西田外喜子

ある人間の身長は私より3cmくらい大きくて、小さくもないし大きくもない。ちよつとやせぎみである。1、3年と2年間、彼とクラスは、いつしよだった。それだけに人から、特徴、くせなど色々と私にはわかつている。(これは、つもりなのだが……)

一年の最初、場所がえをして横どうしになったのがある人間で、なれない間はけしこむのかしかりぐういで、しやべりもしなかった。

一週間ほどたつて、横の人物について色々を見た。

第一に、おつちよこちよいですぐわすれものすること。本や今消したけしこむ、宿題などで、宿題の方はしよつちゆう学校でやつていた。がとても勉強ができるので、天才つてとこ。わからないう所などは、いろいろくわしく教えてくれた。

第二に、朝ねぼづするのか、顔を洗つてこないようで、めのふちに、あるものがたまっていた。彼は、白山下の方から来るので、きつと朝は早いのだろう。(これは最近になつて知つたのだが)

第三に、ケンカすると額に青すじを立てて、真っ赤になること。これでタンキな事がよく証明される。それでタンコと言ふあだ名をつけてあげた。(つけたのはよく話すようになつてからの事である)

第四に、ズボンに毎日ねおしするの、か、すじがピンとついていて、わりときちんとしている。(この所は良いのだが、机、カバンの中の整理に対しては、ゼロである。つまり、かちやかちや。

第五に、とても、わがままで、ぼつちやん風であること。二年からも、なおちよつぴりわがままを發揮している。

二年半たつた今では、話さえもうくしにしないような仲になつている。なんとなく話すのがはすかしいし、一年の時のように、べらべら話す話題もないから、自然に話をしなくなった。

それだけ、それぞれがおとなに成長したのかもしれないが、私は前みたいに仲良く話したり、ケンカしておこる、そんな時の事が、うらやましい。

三月になつて体育の時間に男女がフオークダンスをおどるそうだ。その時は彼らと卒業をむかえる最後として楽しく踊ろう。



当番

四組



橋本

豊

一年二年三年とやってきた学級当番。

一年の二、二学期のころ、当番の日は何日かなあと計算した。そのころ教室は黒板も黒板ふきもきれいだった。

ところが、二学期から二年と進むにつれて、当番というものを、ぼくは軽視するようになってきた。そして日誌の感想欄をうめるのに苦心した。前の時もあまりすきではなかったが書けた。

当番の日は感想文を書かなくてはいけないと思うと、ほんとうにその日がいやになった。そして先生方から、「黒板ふきがきたないなどと注意される回数も、前よりずっと多くなった。

三年になってからは、当番になつて

ら、「お前、当番やろ、早く黒板消してこんかいや」と注意された。

他の人たちの当番も、僕よりましかもしれないと思いますが、決して良いとはいえないと思う。それはあいさつの時の号令をかけるのを、当番でない人が一日中かけたとか。黒板がきれいになつていないのに、当番に言わず、先生に注意されたとかでわかる。

この状態では、教室の中の、勉強しようとするふんいきが悪いのが当然だ。「このことなどの原因は、もちろんぼくたちの心がけが悪いのですが、改めろと言つても、始めはよくてもすぐだめになるでしょう。そこでぼくは、こんなことを提案する。

当番を一週間一人でやり、普通の仕事の外に、散らばっている「ミ」を拾ったり、机の整頓などをするのは、一週間だと、号令のかけ忘れや、黒板をすぐ消さない、ということがなくなり、他に前いったことなどの仕事をすれば、自然に教室の中もよくなるのではないだろうか。少し甘い考えかもしれませんが。

中学生での三つの決心

四組



本橋

英一

あれは、たしか一年の夏休み中の出来事でした。水泳のけんてい試験を一年生だけでおこなった。ぼくはクロールでたいへん早く泳いだ。先生が「だれかおぼれたら助けてやれ」と言われた。その時、ぼくは、じょうだんを言っているのだと思つたので、その言葉を聞きながしにしていた。すこしたつてから、プールを見ると、Xさんがおぼれているのを見つけた。ぼくは助ける勇気がなかった。すると村本先生が飛び込んでXさんを助けた。しばらくして、羽柴先生が側へ寄ってきて、ぼくをプールの中へつき落とす。ぼくは水の中ではすかしきで上へあがつて行くことができなかった。水から上がつても、なぜ勇気を出して、Xさんを助けることができなかったのか、あとか



PHOTO ID - 22445266

ら、くやしさを、へんな気持ちでいつば
いだった。それ以来、ぼくは、自分のよ
いと思ったことを、すぐ実行しよう
と思った。

二年になつてまもなく、修学旅行が
あった。バスの中では、みんな歌を歌っ
ているのに、ぼくだけ、みんなと正反
対のことをしていた。宿へ着いても、み
んなと、いつしよに、団体行動をするこ
とができず、反対のことばかりしてい
た。学校へ帰ったとき、みんなに、ひは
んされた。それにくわえて、先生に呼
ばれてさんざんおこられた。ぼくはそ
の日以来、どんなにくやしいうことや、
いやなことがあつても団体行動をみだ
したりしないでおこうと決心した。

三年のちようと夏休みごろから、受
験体制に入った。日がたつにつれて、ぼ
くの心はいらいらしたが、二年のとき
決心したことを守つて教室をみだし
たりしなかつた。つい最近私立商等学
校の試験があつた。ぼくたちのクラス
のYさんはある女子の私立商高等学校へ

上がった。ぼくとくんは、何を思った
のかAさんに、その商高等学校へかるく
あがれたのに、だらやなと言つた。A
さんはおこつてすみに行つてしまいま
した。そこへYさんが行つて、どうした
のかAさんに聞いた。Aさんはぼくた
ちが言つたことを、ぜんぶ話した。な
にを思つたのかYさんは泣いてしまつ
た。あとから聞いたら、ぼくたちが言
つたことが原因だという。これから、
人のいやがることを、ぜつたに言わ
ないでおこうと思つた。

これが二つの決心です。

思い出の中から



一組



木滑由美子

最初に一言、「この作文をかく前に、
太田先生が文集を読んで、「題材は、君
自身のものでなければならぬ」と言

われましたが、私には、そういう特殊
な題材がありそうもないので、結局私
のぐち話になつてしまいました。中学
生最後のぐちだと思つて、いろいろつ
づてみました。

中学生になつて私はたいへん反抗的
な子になつたと自分で思います。それ
は、日ごろの動作にも、表れていると
思いますが、いちおう、すべてのもの、
すべての事に対して反感を持つてみな
ければ、気がすまない様に。だから、
人気のあるスターや歌手は大きい
である。少年達に人気のある野球の巨
人軍がきらいなもの、その影響だろう
と思う。

ある小説の中に、私と同じように、
人気者に反感をいだく男子がいた。そ
の男の子が言うには、「つまり僕が反
感をいだくのは、その人に対してある
一種のねたみ、劣等感、それから、その
人たちの影になつてゐる多くの人達へ
の同情心などが、いりまじつてゐる」と
いうような意味の事であつた。そう言
われてみると、なんとなくそう思われ
てきた。実際そうだったかもしれない

い。クラスの人の事にしても、口こそ出さないが、いちおう、ねたみや劣等感を持つていた。

いやしい事だが、私より利点を持っている人がたくさんいる。だから、私ねたみや劣等感を持つ。当然の事だと思う。だけど人間がもつともつと素直だったら、こんな事はありえないだろうに……………。

自分はあの娘より劣っていると思って、ひがみ、ねたみや劣等感を持たないで、相手の利点を認め、自分は、少しでも、その娘に近づこうと思って、努力してほしいな。

私のモットーの少女とは、簡単にいうと、苦しんでもいい、悩んでもいい。でもその困難から立ち上り、前向の姿勢で歩いていくという少女です。もちろん私なんか、とうていその少女までは、およびませんが、でも一歩一歩近づいて、行きたいと思っています。

よく友達が、からかい半分に、言うた事でも、すぐカッーと頭に來てしまふたちです。感情的な私になったのも、この影響力でしょうか？特に容姿の事となると、もう頭どころではな

く、体全体がカッーとなります。でも、気にしない、気にしない。気にしている方がよっぽどバカだと思ったからです。せつかくもらった、もうどうにもならないこの顔に、もつと誇りを持って、という事がわかったからです。他の人からは良くみえなくても、自分にとっては一番大切な宝物です。金をだしても、「ダイヤモンドと交換してくれ」といわれても、かけがえのない顔です。

自分の顔にもつと自信をもつように。それから、よく喧嘩なんかで、相手の容姿をいう人がいる様だが、最もいい方法だから、やめてほしいな。私のねがいは、早く「デッパ」と言われても「バイなーに」と答えるようになるらしい事である。

もちろん、それまでには、いくつもの感情を、通りこさなければならぬが、それより先に、心に澄んだ水がわきでる泉を、つくらなければならぬ。

泉からは、永遠に水がわき出て、それが心のすみずみまで行きわたる。それをいろんな人達に、のませてあげ

る。すばらしい事だな。そういう日が一日も早く来る様に。



思ひこじ

三組



内藤 秀幸

ぼくは、この三年間でだいぶ変わったと思う。それは、考えがだいぶ広くなったというか、おおきくなったというか、わからないが、まあそういう考えを、もてるようになったということがある。

テストがなんだ、人間は、テストなんかで決まるものじゃないと思って、今は、そのテストが、世の中をのさばりあるいている。今の世の中、テス

トの点や学歴なので、人間の進む道が、きまつているように思われる。学校でも、受験勉強にいそがしく、個性のある人間をつくるということをしてないように思われる。

キョーリー夫人のことばに、次のようなのがあつた。

「われわれは、なにかの才能にめぐまれている。そして、このなにかに、どんなぎせいははらつても、到達しなければならぬ。ということを感じなければならぬ。」

ぼくは、この文をぼくなりに理解してみると、次のようになった。

人間は、一人一人かならず、他の人よりすぐれたなにかを持っている。それを、先生や、親、あるいは他人そして、自分でも、みつけて、それをのびしていかなければならぬ。

同じ教育をまなび、同じことをして、自分のしたいことも、受験勉強やなにやらで、できなくなる。そんな世の中をすぎじやない。自分のすきなことを、一生けんめいやっているうちに、きつと世界の人々が、「あつとおどろ

くようなことをやるものだ」とぼくは信じている。

話はかわるが、自分のことは、自分が一番よく知っているようにいわれている。また、そのように各人が思っている。しかし、僕は自分のことは、わかりにくいものだと思う。しかし、他人のことは、よくわかるような気がする。

自分の欠点をきかれた時、すぐにこたえられる人は、すくないだろう。僕は、自分の欠点をこじにかきだしてみた。これは、自分が考えたものと、他人から見た僕の欠点をかいてある。

1、他人のいやなことをいう、またする。

2、いたずらをする

3、責任感や自主性がない

まだあるようだが、なかなか思いつかない。

前にのべた、世の中をみつめることや、自分をみつめることは、どこからきたか考えてみた。するとそれは、読書によつて

つくられたことではないかと思う。ぼくが、ほんとうにいたかつたのは、この読書についてである。

本を読んでいる時、まるで自分が主人公になつていようなさつかくをおこす。このように、読者が本の中にはいつていけるような本こそ、名作といわれるようなものではないだろうか。たとえば、主人公がえらい人になつたり、勉強がよくできたりすると、まるで自分も、えらい人になつたり、勉強がよくできたりするような気がする。それだけに、主人公の考えや、思つたりすることが直接かんじられる。また、主人公の個性的な生き方もわかる。つまり、作者の思想というものがつたわつてくる。作者の世の中をどういうふうに生きようか、という考えが感じられる。

いろいろな本をよむことによつて、作者の思想にふれ、人間をつくり、世の中に対する、自分の考えをもつてくる。だから、読書はせひとも必要な事だ。ぼくも大いに本を読もう。

先生にひとこと

ぼくがいつも文をかくとき、頭にうかんでくるものをそのまま、オラオラと書くから、段うくとかいうものは、あまり考えないので、ばらばらである。

いつも自分でわかっていて、先生から、よく注意をつけるが、なかなかおらない。

よみにくい文をいつもよませてすみません。



世の中



五組



飯田 守

今、世の中は不景気である。国民は物価高でくるしんでいる。そんなことをよそに僕は受験勉強にいそがしい。勉強がなかったら、どんなに楽しいだろう。と思うこともある。

しかし、世の中にではるなり之苦しいことがある。僕は実際に経験したことはない。が、母もそういって

をよく言う。実際そうだと思う。ちょっとしたことをおおげさに言ってみたり、人の悪口を言ったりする。しかしこんなのは序の口かもしれない。世の中の人はすべて働いている。中にはどうくなのがいる。無断で人の物を借りる。そういうことをするから、警察が繁盛するのである。

世の中にはいろいろな職業がある。サラリーマン、百姓、プロスポーツ、漁業、医者、数えればきりが無い。いろいろな職業のなかで、一番偉い職業は何であるか。そんなことは一概には言えない。しかし、重労働の仕事とか、楽な仕事はある。しかし高校とか大学とか出なければならぬ職業もある。たとえば、弁護士である。世の中にはおかしな考え方があふれている。良い学校、良い就職である。こんな考え方があふれているから、おかしい現象がおこる。

何日か前の新聞に、こんな記事がでていた。

「東京大学付属幼稚園の願書締め切り」

この記事を読んでちよつとびっくりした。幼稚園入園の時から願書である。まだ何もわからぬ子供がかわいそうである。かたんなテストでもするのであろう。これも親心というものか。また、こんな記事も出ていた。ある母親が、大学の付属中学校に入れようとして、金を出して、入学をたのんだ。それがバテて、だめになった。これも前に述べたあの法則にあてはまる。こんな考え方はよくない。しかし、現実はそのなっている。現に大学出の就職者と、中学出の就職者の給料がちがつている。それに昇級の早さもちがつている。これは矛盾している。しかし世の中はとも広いから急に改めようとしても無理である。しかし、きつといつかは改まるであらう。それには長い時間がかかるであらう。それを気長に待ちましよう。今度はまた僕たちのことにもどろう。

責任をもつて

三組



奥村真理子

僕は国語の時間が好きです。国語の時間になると心が広々とする。しかし国語の時間が終わって数学になると急にこせこせする。数学の公式や、ややこしい計算になるといやになる。これを生活にたとえれば、山の中で俳句などを作っているのんびりと生活しているのを、急に都会の真ん中へほうりだされたようなものである。読者のみなさんもだいたい想像がつくでしょう。そんなことを言っていたって、高校入試が

せまっているのだから勉強しなければならぬ。高校入試ではなくてもしなければならぬ。どちらにしても、いっしょうけんめい勉強しなければならぬ。これが運命なのだからしかたがない。いまさらじたばたしてもはじまらない。

だから、おとなしく勉強しよう。



このごろは、無責任時代とかなんとか言われているが、自分に与えられたことをやらないという。無責任な人間として、最もいけないことだと思う。私もこんな経験がある。

いつだったか、冬のある寒い日のこと、私はそうじだった。寒い日のことなので、あまりそうじははかどらなかった。だいたい終わるころになった。私は電車で帰らなければならぬが、電車に時間が、五分ほどしかなかった。

この電車にのらなければ、三十分も待たなければならぬので、バケツの水をそのままにして、「だれかがやつてくれるだろう」と言う気持ちで帰った。

あくる日、学校に来てみると、バケツの水はそのままになっていた。「みんなも、私とおなじ気持ちでいたのだ」

と思った。これは、ただ、バケツの水のことだけれども、もし、これが火のあと始末だったら、どんなことになっていただろうか？と思うのだった。それから、私は、何事も責任を持って、事にあたってきたつもりだった。

三年生のある日、私はノートを忘れてきたことがあった。その時分、先生もずいぶん、予習、復習のことを言われ、よく調べられた。前の日に、一生懸命調べて、ノートに書いておいたのに、忘れてくればなんにもならない。その先生は「二日一日の予習が先決だ」と言われていたし、なおさら気がかりだった。母に電話をして持つてきてもらった。

ところが、その日先生は、体のついで、授業に出てこられなかった。私は「先生つて、わたしが、やつともつてきてもらったの」と思っていた。

それから、「二三日たった日、わたしは、先生から、「責任感があつてよい、あの日、授業に出られなんですまん」

と言われた時、自分が、いままで責任を果たすということ、他の人から、ほめられた。そこです、先生を許してやろうと思った。しかし、自分で考えてみると、今までしたことは、ほんとうに責任を果たすことではなかったのではないか、という疑問がわいてきた。

それからというもの、何をやらなくても、自分に与えられたことだけは、責任をもつてやることに、いつそう努力してきた。それは先生、あるいは友達には、そういうふうには見えなかったかもしれない。でも私は自分で自分にやってきたつもりだった。だから時には、人からでしゃばったと思われることもあった。これは私だけの経験であるから、だれもが私のようなことを、したり思ったりしてとは思わない。

だが、私たち一人一人が、自分に与えられたことに責任をもつていかなければならぬことは、だれにも言えることです。

私は、「責任をもつ」とのことばをいつまでも、実行していくつもりです。



一点

五組



酒井

達

この世には何と多くの人が住んでいることだろう。両親、兄弟、友達、先生、隣人、考えてみただけでもソツとするほどいる。しかし、そのひとりひとりが、私にとって貴重な存在である。彼がいなかったらあのひと、私が

あわなかっただろう。また思う。人間一人一人の重要さを。

そこで、また考える。そういう多くの中の私は、そのような重要な存在なのだろうか。地球の中の、何十億の人々の中の一人、ひよつとしたら私なんか、この世の中に、存在する価値がないのかもしれない。地球の一点、顕微鏡でも見えない一点なのではないだろうか。心配でたまらない。

でも、私は、人々に語る。彼らが、私にとって大事なように私が、彼らにとつて必要なのではないだろうか。彼らも点である。小さな小さな点である。しかしその点は、いくつもいくつも集まって私の回りを点で真っ黒にうずめる。また私もその集まりに参加する。でも、ある一点がくずれると、その集まりは分裂する。たつた一点で。

A君と私の関係は、友達同士か。たつたそれだけの何か。何だか変だ。何かそこにある。何かがある。私とB

さんとの間にも、Cさんとの間にも、何だろう。ちよつと待ち……………」

そうだ、あれだ。感情の行き来がある。どんな関係よりもすばらしい行き来だ。ある時は薄く、ある時は激しく、それでの集まりは、きつとこわれないんだなあ。じゃ、その一点は目爆してしまうことはないだろうか。自分の感情に負けてしまつて、だれも、その一点を助けてやらなかったりしたら。けれども、その一点は、下唇をかんで、がんばるだろう。一点として存在を保つために、考えて、考えて、自分の納得いくまで考えて、そして答えを見つけたし、導火線を消すことだろう。でも、その答えを見つけるには、どうしたらいいんだろう。

その答えは、今わからなくてもよい。どこかの、だれかが、言つたつけ、「自分にうち勝つ」とは、勝利のうちのさいだいである。」と。

「一つわかつた」とがある。それは、自分の敵は自分だといふことである。

私達は、一点の存在を保つために、その最大の敵と戦わなければならぬ。あの集まりのために。じぶんのために。そこでまた、一点の重要さを知ろう。



友達

二組



詠

明美

「友達つて、どんなもん」と聞かれたら私はきつと「うう」答えるだろう。

「友達」と聞き返し、相手が「うん」と答えると、「こまつた時に助け合つのが友達や」と答えるだろう。でもよく考えてみると、友達にもいろいろ種類があると思つた。

第一番 — ただ何となく「じよに」という友達。

第二番 — ただの遊び友達

第三番 — こまつた時には助け合う友達

第四番 — グループになつてつき合う友達

第一番 — 学校友達などについて種類の友達を持つ人は、ひつこみじあんで、こ独な人が多いのではないだろうか。だから、友達と深くつきあうことに一種の恐怖みたいなものを感じているのではないだろうか。

第二番 — 只の遊び友達、これは現在の友達同志の付き合いの中でも一番多いのではないだろうか。でもただの遊び友達だから、付き合いも浅く、離ればなれになるとすぐ相手の事はと忘れしてしまい付き合わなくなつてしまふのが多いだろう。

第三番 — ふつとに親友と呼ばれているものであり、たいていの人は、こいうい友達をほしがっているにもかかわらず、こんな友達を持つてゐる人は案外少ないのではないだろうか。

第四番ーグループでつきあう友達。男同志、女同志、それぞれ何人かのグループを作って、つきあうという場合もあるだろうが、たいていは男女一しょになつて、何人かでつきあっているのがグループでつき合つてゐる中では一番多いのではないだろうか。

さて、話は変わりますが、今、私が最もほしいと思つてゐる内の一つに、友達があります。(ここでもいう友達とは親友のいみでもそうかといつていいわけでもありません。私がこまつた時、相談を持ちかけると、相談にのつてくれる人は何人かいます。でも私は三年でもうすぐ卒業してしまい就職をする人はそれぞれの職場へ、高校へ進学する人もちがつた高校へ行つてしまいます。そうなつた時、今、あの人は、私のしょうがい親友だと思つていても、それぞれ離れてしまい会う機会も少なくなるや、どうしても離れてしまうのではないか。

私の場合特にこのことは言えると思います。だから私は、離ればなれになつても、今までと変わらずに付き合つていける友達がほしいのです。(ここ

までくると私は親友というものを持つてないことになつてしまった。)

今私達の一番深刻(一番)というのはおおげさかもしてないが(な問題は、一生付き合つていけるような友達がない事だと思ひます。そして又、たいていの人は、心の底では、こつこつ友達を持ちたいと思つてゐるのです。それなのに、今私達はどつして、そんな友達を持てないのでしょうか。(昔の人々はもつていたかと考へて見ると私は持つていたように思ひます。時代がちがうから、私達は持てないのでしょうか。

今の時代は、受験地獄であり、そのため、友達は皆敵だと思つてゐるようなことがよく新聞などに書いてあります。

みんなはほんとうにそう思つていて、だから友達を作れないとしたら問題だと思ひます。

それでも私はすこしもさういふことを思つてゐないのに、やっぱり友達にはできません。又、私は、友達のできにくい人たちといふことはわかつてゐます。でもそれだからといつてあきらめ

てしまへる問題でもありません。又、理由はこんなことだけだとも思われません。

やはり一生かけての友達ができないといふのは、今の世の中に問題があるのでしょうか。もしさうだとすれば、私は、それが何であるかをつきとめて、未来のためにも、あらためていかななくてはなりません。

友達



五組



宮岸千賀子

もうすぐ二年間の中学生生活もおわりである。この二年間の間にいろいろな友達が出来た。その中の一人、生まれてから幼稚園に入り、保育所を出て、小学校から中学校を卒業するまで、ずっと仲の良い友達Aさんと今度は離れ

なくてはなりません。それというのも、Aさんは就職、私は高校へ進学するためでした。

これからは、私一人で、学校へ行き、一人で帰ってくることになるだろう。しかし、Aさんは私の家の隣なので、直々顔を見合わせることもだろう。

それから、「この前、こんなことがありました。その日は音楽の授業があったが、私は、二年の教科書を持ってくるのを忘れたので、Aさんにも、他の子に聞いてくれるようたのみしました。しばらくして、Aさんが、「1・2組にあるらしいって、Bさんが言ってた。」と言って来ました。私とAさんが、1・2組へ行つて見ましたが、ありませんでした。私はBさんに、「なかったがいね」と言つてやりました。するとBさんは「そんなこと知らんわいね、あんた持つてこんさけ悪いがや」とプンとした顔で言つて教室へ入つていきました。わたしはむーとして何か言つてやりたい気持ちになりました。

Bさんとは、二年の時、教室がいつしよで私とAさんとBさんは友達でした。Bさんの家へも遊びに行つたことがありました。そんなBさんが、三年になると、「こうも変わるとは、私にとつて意外な事でした。そんな事があつてから、Bさんとは口も聞いたことさえありません。やつぱり、友達は友達らしく、いつまでも、仲よく交際できる人が良いと思いました。

これから、高校に行つても。

ところが、翌朝、学校へ来て、ズツクをはいていると、Bさんが、「お早ようこと、ほほえみながら、私に声をかけました。私は昨日のこともあるので知らん顔していようかと思ひました。けれど、Bさんに悪いと思つたので、「お早ようこと、言つたものの、なんだか変な気持ちでした。



社会への窓(五組)

畑 信明

依頼心をすてて我が道を進もう

酒井 達

かれは、なぜ「地位」と「名誉」と「財産」だけで、満足できないのだろうか

又 俊和

最後の力をだしきつてガンバろう

米田 雅春

自分で良いと思つたら、とことんまでやりぬこう

山本 正一

なにことも、最後までやるという根性が必要である

大崎 和夫

物事を考えるとき、そのぎやくの事も考えてみよう

原 伸一

努力して、また努力、これが人生の道

沢田 和祐

努力しながら、物事にうちこもう

徳田 幸陽

成功のかけに努力あり

宮 要介

「過去をふりかえる」それもいい、
しかし「未来に希望を持つ」
この方がはるかにいい

鎌田 守

人生の出発は川原の上流の石である

辻 正広

「幸福とは愛情と平和によつて

きずかれる」

麻木 啓二

「これから的人生を

清く正しく生きよう」

橋場 茂

たえず自分の最善をつくして

限らない確実な前進を続けよう

樫田 幸夫

「この古い学校とも、もうおわかれだ

とつてもさみしい

表田 勇

いかなるものでも努力が必要

谷口 信一

難問を解くには知識がいるその知識
をつけるために勉強するのだ

寺田 仁

いつ、いかなる時でも
今、しなければならぬ事があれば
ただちに実行しよう

藤本 聖一

問題は再三再四読め

山崎 二郎

「人間ははたらくことをいでんにもつ」

井上 章

社会にでたら しっかりやろう

中田観世音

今すべきことを今実行するには

ほんとうに勇気がいります

北村 光信

七転八起の精神で！

越能 年子

努力すればするほど、幸福が生まれる

山口真由美

氷をとかすような気持で

物事にぶつかつていこう

寺田 行枝

自分のえらんだ正しいみちのりを

まっすべに前進していこう

山岸 久枝

努力

徳田 明美

何事にも自分なりの努力が必要であ
る

藪田 静江

「後悔は先に立たず」

という言葉があります

物事をする時は時間を無駄にせず

慎重にしましょう

本田 啓子

練習で泣いて 試合で笑おう

山本久美子

人生の前途に希望あり

今西 啓子

人間に悪いことを

教えないようにしよう

宮岸千賀子

「いろいろ」言うに「いろいろ」でも

心にひつかかっているものがあるなら

ば年上の人に相談することだ

未来に輝かしい希望を持つて

しっかりと頑張りぬこう

自分は自分 他人は他人 作田 純子
 コーモアと余裕をもって 柿 小柄子
 生活していこう 林 和子
 余裕をもって事にあたれ 明日があるとおもうな 大崎恵美子
 思った事は進んでやろう 引込み思案ではいけない 安田 歩美
 何事にも負けず一生懸命頑張ろう 手近な目標から果たそう 太田 久江
 体はきよく心ただしく 希望と勇気を持って頑張っていく 西田千津子
 北 登代子
 堀 晶子
 若さは君の最大の魅力である 諸君この若さで前進せよ 中村小夜子
 努力すればするほど物事に ねうちがある

一歩一歩前進し
 あとくやみのない生活をしよう
 北村志津子



感動したもの

もう少し読書したかった。私達の時代には是非読んでおかねばならないという書物も知っている。しかし、入学試験が気にかかり充分読書出来なかったことは残念だ。山元君はジャンクリストフを読んで深く感動している。これこそ良書は私たちに何を与えるかを示しているものである。

感動したもの

四組 山元 敏晴

ジャンクリストフ ロマン・ロラン
 ン・クリストフはドイツのある田舎に生まれた。クリストフは赤ん坊のときから、苦難の道を歩く運命にあった。彼の一家はとても貧しかった。祖父も父も楽団の演奏家だったが、父はひどい飲んだくれで、クリストフが泣くところを「さういって殴りつけた。クリストフは自尊心が強く強情だった。

ある日、彼は母親につれられて、彼女の働いている所に行つた。その主人の子供たちと遊んだ。子供たちは、クリストフが召し使いの子であるということがわかれると急に彼を軽蔑し、からかい始めた。

クリストフには耐えられない事だったが、彼はどうして子供たちが自分をいじめなのか、分からなかった。彼は彼の母親がこの世で一番えらいのだと信じていたからだ。

彼は憤怒した。一人の子を？し、もう一人の子には拳固をくらわせて地面にたたきつけた。子供たちは泣き叫び、彼はそれを聞きつけてとんできたその子供たちの母親に打たれ、味方だとおもっていた自分の母親にも打たれた。

彼は不正というものを知つた。

クリストフ又、音楽を愛していた。いい音楽を聞くと身を震わせ、齒をくいしばり、しかめつづらをした。

彼は大人たちが体裁ぶつて、音楽の批評をすることがきらいだった。彼は家の者が働きに出てしまつて家中にだ

れもいなくなると、すぐにピアノの前にすわつた。

そのピアノは古ぼけて、あまり正確ではなかったが、彼はそのピアノが好きだった。父親は、そんな彼を見て、神童ではないかと思つた。いや、そうであれと願つた。父の中にはむらむらとある欲望がわいてきた。

その日以来父はクリストフに非常な熱心さでピアノを教え始めた。クリストフは父の熱心さにおどろき、父は本当はいい人間なんだ、いいお父さんなんだと思つた。

しかしある日、彼は父と祖父が彼のことについて話しているのを聞いてしまった。彼は父の打算を知つた。そして、そのような父を恨んだ。

彼はつぎの日から、自分に才覚がないことを父に知らすために、練習の時、何度もわざとまちがえた。父は一節ごとに違つところに動くクリストフの指を見てクリストフの計画を見ぬいた。父は怒つた。クリストフは反抗した。

クリストフは、もうピアノは弾きたくないと言つた。父は彼を打つた。クリ

ストフはさらに「第一に、僕は打たれたくない。それに……それに僕は音楽はきらいだ。」といった。彼はまた打たれた。

しかし、翌日から又練習させられた。彼はそれ以上反抗しなかった。

そしてクリストフは七才の時に舞台に出て彼の作曲した「幼き日の樂しみ」という曲を演奏することになった。

その当日、彼は舞台へ出のがいやだった。彼の父があまりにもごてごてとクリストフを着かざらせたからクリストフは、自分が見世物小屋の猿みたいに感じられ、たまらない屈辱感を感じたからだつた。

彼は舞台に出た。一人で舞台に立つて沢山の観客を見たとき急におじけづいた。広い舞台の中央にある離れ小島のようなピアノに向かつて突進した。

演奏は大成功だった。舞台からおりるときがまたたいへんだつた。彼は舞台裏へ向かつてまっしぐらに逃げこんだ。

ちやうど、その瞬間、一人の婦人が小さな花束を彼に向かつて投げ、それ

が彼の額に当たつたので、彼はすつかりうろたえメチャクチャに走り出した。そのため椅子に突き当たつて、ひっくりかえつた。彼がうろたえればうろたえるほど人々は大笑いした。彼は舞台裏へかけこむと急にワツと泣き出してしまつた。

「この日の屈辱感は長いあいだ忘れることが出来なかつた。彼は父と共に、世界中の人間を軽蔑した。」

彼の家は本当に貧しかつた。毎日の食事は非常に貧弱なものだつた。父は、おかまいなしに皿にもる、その残りはもう半分くらいになつてゐる。二人の弟たちに母親がとつてやる。クリストフの番になると、じゃが芋が三つしか残つてゐない。クリストフは母がまだ取つてゐないのを知つていたから、平気な様子で、

「お母さん、一つだけでいいよ」

「みんなと同じに二つよ」

「いいんだ 一つで」

「お腹がすいてないの？」

「うんあまりすいてないんだ」

だが、母も又、一つしかなかつた。そんな時、たいていは父が残つた一つのじ

やが芋を取つてしまつた。しかし、今ではクリストフは用心深くなつてゐた。彼はそれを取り弟のエントルスにやることにした。エントルスは食いしんぼうで、食事が始まつた時から横目でそれをみながら、しまいには、くれといつてねだつた。

祖父が死んでから父の素行はますますひどいものになつた。そしてついに父は楽団をやめさせられた。

そのころクリストフは楽団の第一バイオリンを勤めていたし、宮廷のピアノ弾きでもあつたから、たつた十四才で一家の主人になつた。

父は楽団をやめさせられてからは、生きがいもなくしたのか、前よりも悪くなつてゐた。そんな父もとうとう死んでしまつた。

クリストフは自分が父に対して親切でなかつたことを後悔した。二人の弟たちは、父がいなくなると、すぐに家をとび出してゐた。

彼は母と二人きりで暮らしている。彼はだんだん無口になつて、人づきあいが悪くなつてゐた。しかし、彼の体の中には、何か強いものがあつた。

クリストフはこれから逆境にめげず強い信念を持つて生きるだろう。

クリストフの少年時代

僕が、この本を読み始めたのは、三年の十月、十一月ごろだつた。それから少しづつ読んで、冬休みごろ読み終わった。

読み始めたときは、翻訳くさく、漢語が非常に多いので、何度も読みかえして、前後の關係から大体の意味をつかんだ。そんなふうだから一ページ読むのに長い時間がかかつた。しかし、慣れてくるにしたがつて、めんどつくさくなり、適当に解釈してゐた。こんな読み方はよくないと思つただけでもない。この本を読むのはこれつきりではない。これから何べんもくりかえして読んでみる。その時はまた違つた印象をうけるだろう。

ジャン・クリストフ・クラフト 僕はこういう人間に、魅力を感じる。

第一に彼は自分というものをしっかりと持つてゐる。自尊心が強い。彼は、人が彼を侮辱することを決して許さない。

第二に、彼は愛情深く、弱い者に対して親切だ。

第三に、彼は不正なことに對しては、あくまで反抗する。どんなことにもくじけない強い意志を持っている。

第四に、彼は音楽にかけてはすべての才能を持っている。

僕はクリストフのように自分にきびしくない。すべてに自分に負けてしまふ。勉強をするにしてもそうだ。きりいな科目はやりたくないし、計画をたててもなかなか実行できない。

死ぬまで自分にきびしく。

クリストフを悪く解釈すると、

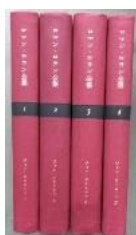
彼は、感情的すぎるのではないか、又世間にすねているような感じもする。とも言えると思う。

彼がもし現代に生きていたら、青少年の非行化などという問題については、彼はぜんぜん心配ないだろうし、高校受験だといってノイローゼになることもないだろう。又、大人になっても自分の信念をつらぬき通すだろう。危ないことをさせ、人をけおとして出世し、人生をうまく生きるというような芸当は彼には出来ないだろう。現

代には(特に日本)ジャン・クリストフのような人物は少ない。僕はクリストフのような人間になりたい。一歩でもいいから近づきたい。決してくじけなく、いつも自分にきびしく、そして自信を持つ。

クリストフは決して完璧な人間ではない。が、何か、一本すじ金がはつていふような気がする。

僕がこれからの人生で困難に負けてくじけそうになったとき、そのときはクリストフを呼ぼう。クリストフはきつとはげましてくるにちがいない。



モンテクリスト伯

五組



辻

正広

一学期のある日、ひさしぶりに、図書館にいきました。僕がいつも借りる本は図書館の方へいつてから決める方でした。その日も「何を借りようかな」と思いながら、あちこち見て回りました。あいにくその日は、よく借りる歴史や地理の書箱の中でよいのがなかったのかえろうと思いましたが、どういふ気が、小説の書箱の多くある方へいつてみようという気になりました。

2つの本棚の間を幾度も往復するうちに一さつのおぼけた本が目にとまり手にとってみると白いペンキのようなもので『モンテ・クリスト伯』と書いてありました。おもしろそうなので、借り、家へもつてかえりました。

その夜、その本を読みました。始めの感じでは、なにか冒険的なものかと感じました。読んでいくうちに、おもしろくなり、何度も何度もくりかえし

て読みました。そのうちに、主人公エドモン・ダンテスの生き方につよくひきつけられました。物語は一人一人の人間の復讐記みたいなものです。

復讐なんて非科学的だと思われる人もいると思いますが、ぼくはそうは思いません。

結婚をまじかにひかえた幸福の絶頂にあった一人の青年が友達に裏切られ、身も知らぬ罪をきせられ、不幸のどん底に突き落とされてしまう。初めのうちは何かのまちがいだと思うが、時がたつにつれて、絶望に打ちひしがれるが、一人の僧侶によつて教養と富を受けつぐ。十五年後、彼は脱獄し、自分を不幸のどんぞりにたたきこんだ友人達に復讐を誓う。

こうして彼は、巧妙な手口と財力によつて検事総長のヴィルフォール、銀行家のダランタール、伯爵のモルセルに、次々と復讐をしていく。

最後にモルセル伯爵と以前の恋人メルデスとのあいだに生まれたアルベールに決闘を申し込むが、メルデスに哀願され、自分が死ぬことを決意する。このとき彼は、『復讐を思い立つ

た時にどうして、心臓をむしりとりつかねなかつたのか!』とつぶやくのだが、僕は復讐の鬼と化しながら、なおかつ、人間性を失わない主人公の性格がこれほどよく表れているところは他にないのではないかと思う。しかし結果は、ダンテスが復讐するわけを母から聞いて、アルベールは決闘をやめてしまう。こうして復讐の相手は、三人とも完全に社会の中からほうむられるのですが。

僕がこの作品で強く感じたことは、一人一人の性格が非常によくでているということ。復讐の鬼となりながら、なお人間性というものをすてられないダンテスからこう感じました。

『人間とはしよせん弱いものである。』と、又、その表現技巧も実に素晴らしいと思いました。

今考えると、この作品を読んでほんとうによかつたと思いました。



考えてみた

「3」をやつつける方法は?

三組 村本 泰子



「3」、私からどうしても離れない危険物「3」。

いくらおっぱらおうと思つてもんで問題にしてくれない。

いつも私にくっついてくる寄生虫みたいなクセ物。

それは体育の「3」。

小学校に入学したとき私について、今まで私から離れたことがない。

なんてずうずうしいんだろう。

「体育の3」そのクセ物が、私をすごい力でせめて来る。一度、二度、十度、百度。そのたびに抵抗する私だが、今では、すっかりおそろしくなつて顔を見るだけで、体が寒くなる。

いまごろ、いい気になってせせらわっているのだらう。

ああ、へやうい。

なんとかして、やつつける方法はないものか。いままで試みたことのない方法は……。

それはきつと勇気にちがいない。

もつと勇気がほしい。

もつと勇気があつたらなあ。

そしたら「さ」なんかすべやつつけてしまふの「さ」。



3 「夢」

五組



橋場

茂

たいがいの人は夢を持っていると思う。中学時代も、もうすぐ終わろうとしているのだから、持っていて当然だと思ふ。

ある人の夢は、中学校を出て、高校へ行く人より三年、大学へ行く人よりも十年以上も先輩として、社会へ出てよい技術を身につけよう、というのかもしれない。

ある人は、工業高校を出て、良い技術者として、社会へ出て行くだらう。その工業高校のデザイン科を出て美術大学へ行く人もいるだらう。又、商業高校を出て、銀行員になるうとしている人もいるだらう。大学を出てサラリーマンになるうとしている人もいるだらう。

でも、これは夢だ。現実にならうかは、わからない。でも、この夢も努力しだいで実現するのでは、ないかと思ふ。

でも、その夢というのも、そのままでは、ないと思ふ。「たえず大きくなったり、変わったりするのだなあ」と、ぼくは、思つた。理由はよく自身さうだからだ。

小さい時から、小学校までは、高校、大学を、出て大きな会社の社長になろうなんて、すこし大きすぎるような夢を持っていた。でも中学一年になると、「自動車の運転手になろうかなあ」などと、前よりはるかに小さな夢になった。一年から三年のつい最近までは、土工技士になれば、大きなダム、建築士になつたならば、大きなビル、自分の家などを設計して造つてみたいと思つていた。

こつしてみると、「小学校時代は割とサラリーマンにあがっていたのだなあ」と思ふ。でも中学校に来てからはサラリーマンなどには、絶対に、ならないと、思ふようになった。そして自分の腕、つまり、技術を身につけて働くことにあががれている。

中学の終りごろ(現在)では、技術を身につけようと思つているのには変らないが「自動車整備工」になろうかなあと考えている。どうして、建築か

ら変わったかといえば、次のような理由だ。

ある日、井上君が、金沢職業訓練所を、受験する、というので、なにげなしに、付いていって、自動車整備科を、受験することにして、受験して、どうにかパスしたからだ。

僕の夢もだいぶ固まったように思う。僕は、一度は、職業訓練所へ、中学を卒業、又は、高校を卒業してから行くつもりだ。ぼくは、現在そのどちらを選んだら良いか、まよっている。でも、どちらにしても、ぼくの夢は、整備士になることだから、二つの場合を考ええています。

中学校を卒業しての場合は、訓練所を卒業する時に二級整備士の免状をとり、そして就職して、十八才で普通車、二十才で大型車の免許を取るつもりです。できれば二級整備士の免状を取りたい。そして二十五才のころには、自分の店を持つてみたい。

高校卒業の場合は、二十才で訓練所を卒業する時に、前と同じように、二級整備士の免状を取り、それからすぐ普通車、三、四年後には大型の免許を取りたい。そして二十八、九才のころには、同じように自分の店を持ちたい。

以上、二つである。どちらにしても、最後には、同じ結果になるのだ。でもこの二つは実現するかわからない。しかし、自分の全力をつくすつもりだ。そして三十才のころに、次のように言ってみたい。

「やっと、実現できた」……………」と。



時間を意味のあるものに

二組



常山 輝夫

今から考えてみると三年生になってからの一年というものは全く意味のない、振るとがらがらという音がきこえるような一年だった。いや、もう少し昔に帰った一年生のころからかもしれない。今やどう考えようと時間の足りない私だけけれど、今になってやっと色々な事をやりたいと思うようになってきた。そしてこれまで持て余してきた時間が非常に惜しく感じられる。

私の今一番やりたい事は、天体の観測とその勉強。夜の十二時頃に自作の天体望遠鏡で惑星や色々な恒星、その中でも重量や星雲を観測していると、寝るのも忘れそうなくらいです。(観測、観測とよく使いますが、スケッチなどは出来ませんし、望遠も良くない

し、天体の知識もまだまだ乏しいので、みなさんの考える研究というものではありません（みなさんは望遠鏡をのぞくチャンスがあったなら必ずのぞいておいた方が良いと思う）。

私がなぜ天体に興味を持ったかというと、自分にもはつきりわからいんですが、たぶんラジオの影響だろうと考えています。そのラジオというのは、宇宙の科学小説のようなものです。知っている方もいると思いますが

一、二年ほど前に終わった「百万の太陽」です。その前のも同じくおもしろい放送でした。その題はわすれましたが、それら聞いている時、主人公たちが活躍する宇宙が、頭の中に手に取るようにはつきりと描かれて、自分が主人公になったような気持で、話の中へとけこんでいったことを今もはつきりと覚えています。単なる作り事とは思えなかった。

私はその当時から天体に興味を覚えただろうと思うられます。そのころ

から私は天文学者の夢を見ていました。そして小学六年生の時（望遠鏡の知識もなかったし、金にも恵まれてはいなかった）で簡単な悪いレンズの望遠鏡を買って大いに満足していました。そのころは先がわからないし、そんなことに特別に興味を持っている友達がいなかった（ので特に勉強しようとは思いませんでした。でも興味を持っていた事だけは確かです。それが今まで続いているんです）。

近ごろやっと本当に観測し勉強しようという勢いがわいてきました。しかし入試も間近になって来たので、もうおそいかもしれませんが、まだこれからいろいろといそがしいことが待ち構えていることと思うけれど、おとなになっても天体のことを少しずつやって知識を身につけたいと思っています。

中学を卒業する前に百分の一でもいいから勉強しておけたらよかったなあ、と今思っています。

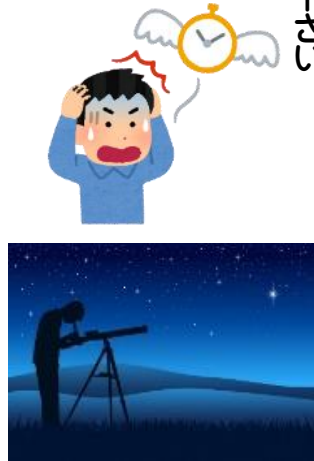
小学校を卒業する時、ひとりひとりとでばくは天文学者になりたいと書いておきながら、言いはなしで努力もせず今まで来たことを残念に思っています。

今までその日その日を吹く風まかせに、あせくろしいことを考えながら生活してきたことに気がつき、残りの短い中学生活のうちになんとかしようと心の中だけでがんばっているわけです。どうにもならないのですが何だかそういう気持ちになつてきます。二年間の反省のまとめとして時間をむだに考えなしに使ったということですが。

人間は生まれてきて短い日々をおくつて生活し死んでいく。その間に人間は自分の思うことをどれだけなしとげることが出来るでしょうか。しかしそのわりにたくさんの時間があまっている。時間は永遠に流れています。が、その内の人間が出現する時間というものは極めて短いものです。人間がやろうとすることを確実になしとげ

るためにはその時間を精一杯使っても足りないかもしれません。学校生活が自分のやりたいことをやる最初のチャンスです。

これからまだ中学生生活をするみなさんへ一言言いたいのは「時間を空費せず、考えて使え」ということです。そして中学時代を意味のあるものにして下さい。



「私の夢」

二組



松田 照代

私は、これまで何を目的に生きて来たのだろうか。毎日ただ、なんとなく、すごしてきたように思われる。い

つもいつも、食べ、寝て、ときには何かに夢中になったりする。そういう夢のない生活だった。しかし今はちがう。自分なりに自分の夢を持っている。それは二つの夢である。

その一つは、中学を卒業して洋裁学校でみっちり二、三年勉強して、基本的なことなど、いろいろ覚えて、そこを卒業し、どこか良い洋裁店へ行つて、デザイナーの勉強しながら貯金する。何年かたつて自分でやっていけるようになったら、自分の店を持ちたい。もしその店を持つことが出来たら、誰でも気軽に入れ、安くて、良い物を作りたい。誰にでも気に入られるように。

もう一つの夢は、自分の好きな歌を勉強し、自分で作詞、作曲をし、それをステージの上で歌いたい。その歌は誰もが明日を夢みてうたう歌。みんなが楽しく口ずさめる歌。そういう歌を歌いつづけたい。

でも、しばしば、こういう不安をおぼえることがある。

自分の個性を生かしてるかどうか。この二つの夢はわたしには大きいすぎるのでは、きれいすぎるのではないかと思う。そうになると、ほかの人は、どんな夢を持っているのか。

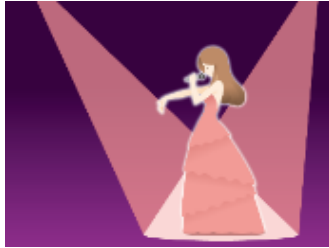
ある人に聞くと、「英語を勉強してスチューデントになりたい」とか「俳優になりたい」という。その人達は、それを実現させることができるだろうかと思うことがある。また、あの人がある大きな夢を持っているのなら、わたしだって、あの大きな夢をもつて、実現させようとしても、いいのではないかと思う。でも、まだ、心のどこかに不安のこっている。

それらの不安を解決し、実現してこそ、りっぱな人間になれるのなら、わたしはそれにつとめ、夢を実現させることに努力しよう。

それでも、だめな場合、自分はどんなだろう。平凡な人間で一生をおえ

るか、あるいは、また、新しい夢を求めて、進んで行くかどちらかになるでしょう。そんなことをしたら、もう、おそすぎるかもしれない。

そうなんても、くじけず、まっすぐな道をあゆんでいくつもりだ。



日記帳続き法

五組



宮

要介

自分は、昨年の一月から日記をつけている。ど、という動機から？と問われても、はつきり答えられない。ただ何となへつけてみようかと思つて、つけ

始めた。いつもだと、つけ始めて一週間もたたぬうちにやめてしまう。いわゆる『三日坊主』と言う奴だ。しかし、どうしたはずみか、今度は一年も続けている。全く自分でも不思議である。

日記を長続きさせるには、努力が必要だ。毎日、何でもいいから書くことだ。特に書くことがなければ、書く必要はない。しかし、日付け等、ちよつとしたことへういは、書いた方が良く思う。

例えば

○月○○日 ×曜日 (快晴)

目をさますと、障子からもれる光がまぶしい。すみきつた空。紅葉した山がようやく秋を思わせる。さあ、勉強に勤しむ秋だ。がんばるぞー！

あまりよい例文ではないが、書くのがいやだったら、せめてこの程度の文章くらい書いた方がよいと思う。

むろん、そんなことはかり書くのはだめだ。書いてもあきてしまう。だから、言つてもないが、誰にも言わ

ない自分だけの秘密(でも秘密をつくることは感心しないとか、学校での事件、自分の悩みなど、こつやつて考えてみると、いくらでもある。そう思えば種きれなんてことはないだろう。書いた後の楽しみは、何か月も前の日記を読んでも、

「ホー、例の事件、この日にあったのかとか、昔のことを思い出すのもおもしろい。日記を書き、それを読むことがたのしみとなるのである。苦しかったこと、うれしかったこと、皆んな自分のなつかしい思い出として、残るのではないだろうか。

ある人が日記を書くことを勧めるのに、「日記を毎日つけると、作文が上手になつていぞ」と言っているのを聞いたことがある。それもそうだが、自分はそうは思わない。そんな動機で日記をつけたって、それは本物かどうか怪しい。自分はそんなのはきらいだ。だって日記をつける根本的な理由は、そんなものでないと思うからだ。

それは別としても、日記をつけているからと言って、そんなに作文がうまくなるってこともなからう。現に自分は作文で大キライ。しかし例外もあるだろう。でも日記をつけていると作文がうまくなる等と言っていいは、学校を卒業して作文を書く機会が少なくなると、自然日記を書くのもやめてしまおうそれがある。だからそんな考え方は改めた方が良くと思う

最後に、自分が日記をつけている最大の理由は、

「自分の人間としての成長過程を知る」ということにつける。しかし、自分と異なった考えで日記をつけている人もいるだろうが、それはそれでいい。

日記をつけることによつて、自分自身を知り、又、社会を冷静に見つめて、平和な政界を築くことが大切だ。



父への思い

父と私

一組



梶喜美子

父を見ると、私は、今まで、文句を言おうと思つていても言えなくなる。

その黒い顔には、苦しみや困難にぶつかつて、苦労してきたことが、きざみこまれてる。そのこづい手には、寒い時にも、頑張ってきたことが、現れている。

父と私は、仲が良い。父には今まで、いろんな事を教えてもらった。美術、習字、音楽。

美術では、家ではペーパーテストなんかしていると、一緒に考えてくれる。金沢へ出ると、必ず美術館へ行く。

絵の観賞の仕方もある。父の言うことはむづかしいが、私にわかることは、一つ一つ作品に現れている、作者の心、何を言いたいか、をつかみ取

れと言つたことだ。だから、この頃は、こういうことを考えて見るようになった。

父が、今一番したいことは、彫刻で、お釈迦様の、頭と顔を彫ることだそう。去年のくれ、母と二人で、仏像を見に行った。父はお釈迦様の頭を色々研究している。

父の字は、私にはよくわからないが、それでも、うまい、ということだけはわかる。父は筆をもつことが好きだ。

音楽では、テレビのレコードコンサートを聞くと、父は、いろいろ説明してくれる。不思議に曲の感じ方が、今までと、ちがつてきた。

父は、こういうことその他に、本を読む事が好きだ。私も、読書だけは、父に似て好きだ。本は始め、スラスラと読んで、もう一度、今度は、一語一語の意味を考え、味わつて読め、と言つのが父の意見だ。本を読んだ後の感想を話し合う。

父は、トストエフスキーの「カラマゾフの兄弟」がほしいそうだった。この本を買ってあげたいなあ……。

こんな、ステキな父だけど、とっても厳格だ。まがった事が大嫌いな性格だ。私も、父のこの性格を、少し受けついでいるようだ。

どこの人でも、父をまじめな人だという。「この父の毎日の楽しみは、家でコーヒーを飲むことだ。」

この父も、もう六十才。

私は早く、おとなになって、父に、楽させてあげたい。

もつと、もつと元気でいてほしい。



父の思い出

三組



宮島美津子

月日のたつのは早いもので、私の一年生の時でした。

「美津子、章と、ものすごい母の声でした。私と弟はとび起きた。そして母の所へとんでいった。そしたら母が「父が、父が」と言っていた。私はすぐに病気でねている父のそばにすわった。私は父の顔をのぞきこんだ。時々しか息をしない。そして、もうこの世の人ではなくなってしまうたのだ。母は父の上になきくずれている。私もなにかあついものがこみあげてきた。でも一生懸命こらえた。あのやさしい父が死んだのだ。

私達は生まれてから一回も父にじかられたことはありません。母にはじよつちゅうしかられている。だが一回

私は父から「じよらじいじよ」を聞いた。それは何かと言うと、私が朝来た新聞を便所に、もつてはいつていた事です。家ではみんなが一生懸命探しているのです。私の行いは好奇心からのもので、でも便所に持つてはいつた所で、全然読めません。私は出てきてすぐ父にやつた。その時言われたのです。父が死んだと言っても、誰も信じません。仕事場のそばの床屋さんも「あの力道山が」と言っています。それほど父は強たくまじかつたのです。胸は胸毛でいっぱい、眉から手にかけて筋肉が勇ましくついている。背中では背骨の跡が見えなくなるほど、左右の所の肉がもり上つている。服を着るたびに、ポキッ、ポキッと音を出す。私は、私のいる町には、こんな力強い、たくましい体をした人はいないだろうと思つている。でも気はやさしいので、よその人には悪口一つ言われたことはありません。だからみんなに、いい

人から先に死んでいくがや」とおしまれている。

父は、大工さんのように、沢山の道具を持っている。だから近所の人は、「あれ貸してくれ、これ貸してくれ」と言って借りに来た。今では、その道具も父のかたみとして、とても大事な品です。近所の人も父がいた時とちがって、借りていつてもすぐに持ってきてくれません。おまけにかえしてくれないもあります。やはり一家の主がいないうと言っている、ばかにしているのかもしれない。

父と母は家を新築することを相談していたらしく、ある日、かわらが家に届いた。そして、木も少し製材してあった。私達はそれを知った時、とてもうれしかった。この家とおおさらばかと、中を見まわした。今いる家もおじいさんとおばあさんが建てた家で、まだ30年ほどしか、たっていないという。でも今は父がいないので家を建てるわけにはいきません。兄も今年高

校を卒業するばかりだし、また二、三年のばさなければなりません。

だから今思うと、いくら静かな父だといつても、ほんとうに父のありがたさがよくわかった。第一に収入が減ったことです。だから母が倍苦労しなければならいと言ったこと、そして進学、就職に片親がいないうことで、何か悪い方にひびいていくようだ。

おまけに大人になつて、父に親孝行ができない。だから私は、母に父の分も一生懸命に孝行しようと思う。そして、父がいなから、みんなと遊んではいけないということもない。もしあったとしても、それに負けず、体をたいてせつに、明るく、伸び伸びと生きようと思う。

父も、私たち一家を毎日毎日、見守っていてくれるだろう。

